

# 滿鐵理事に進出した 平山復二郎氏

先般來大村滿鐵副總裁が上京の際に鐵道省と種々交渉を重ねてみると云ふニュースがあり、其後平山建設局長が北支方面を視察して來てから間もなく平山氏が滿鐵理事に内定したと云ふ噂があつて、噂はやがて事實となつて現はれた。

平山氏は技術家としても官吏としても立派な代表的人物の一人であるから、各方面の先輩達は將來の重任を托すべく相當に目をつけてゐたのであらう、それを滿鐵へ引抜かれたのであるから國鐵としては惜しい事である。

情實とか自己一人の名利とか眼中になく、唯國家の大局の爲に公共に働き得る平山氏は、現下時局に於て日本が要求する最大の技術家だ、然も氏には少しの誇張もなく簡素明瞭な性格があつて、風采を飾らざるが如く常に青年の如き氣分であり、亦良く青年の友となり青年を愛するのである。技術家通有の眞理を求むる理想家ではあるが、必ずしも一本調子の弊に墮するものではない、技術家ではあるが地方鐵道局長もやり、復興局工務課長等の職にもあつて事務的手腕に缺くる處はない。

滿鐵が今後なすべき大陸交通政策の事業は日本内地の問題以上に重要なものである。今や總ての技術を綜合して東洋民族の爲に大陸

を經營する歴史的な劃期時代が展開されてゐるのである、日本の有ゆる技術が其處に強力なる文化の種を播かねばならぬのである。滿鐵理事としての平山氏の前途は頗る多忙である、然し平山氏の性格と手腕を以てすれば軍部も政治家も安心して其進路を支持するであらう。



因に平山氏は明治二十一年に東京に生れ、本年將に五十一歳の働き盛りである。明治四十五年東大土木工學科を出で、直に國鐵に入り同年十二月一年志願兵として入隊工兵少尉となり、復職後主として建設に従事し、大正九年六月米國に留學し、歐州を経て十一年十一月歸朝、關東大震災後に故太田圓三氏等と共に復興院技師を兼務帝都の復興工事に貢献する處多大のものがある。昭和四年七月より岡山建設事務所

長となり、次いで米子建設事務所長を兼ね中國地方の山丘鐵道の建設に手腕を發揮し、昭和六年十二月熱海建設事務所長として丹那隧道の工事に科學的施工法を採用して竣工に近づけて本省工事課長に轉じ、次いで仙臺鐵道局長に榮轉し東北方面の交通行政及び技術公共事業に貢献する處あり、昨年七月河原直文氏引退後の建設局長として本省に入り、技術家本來の使命に精進して各方面の公共事業にも貢献して今日に及んだ。